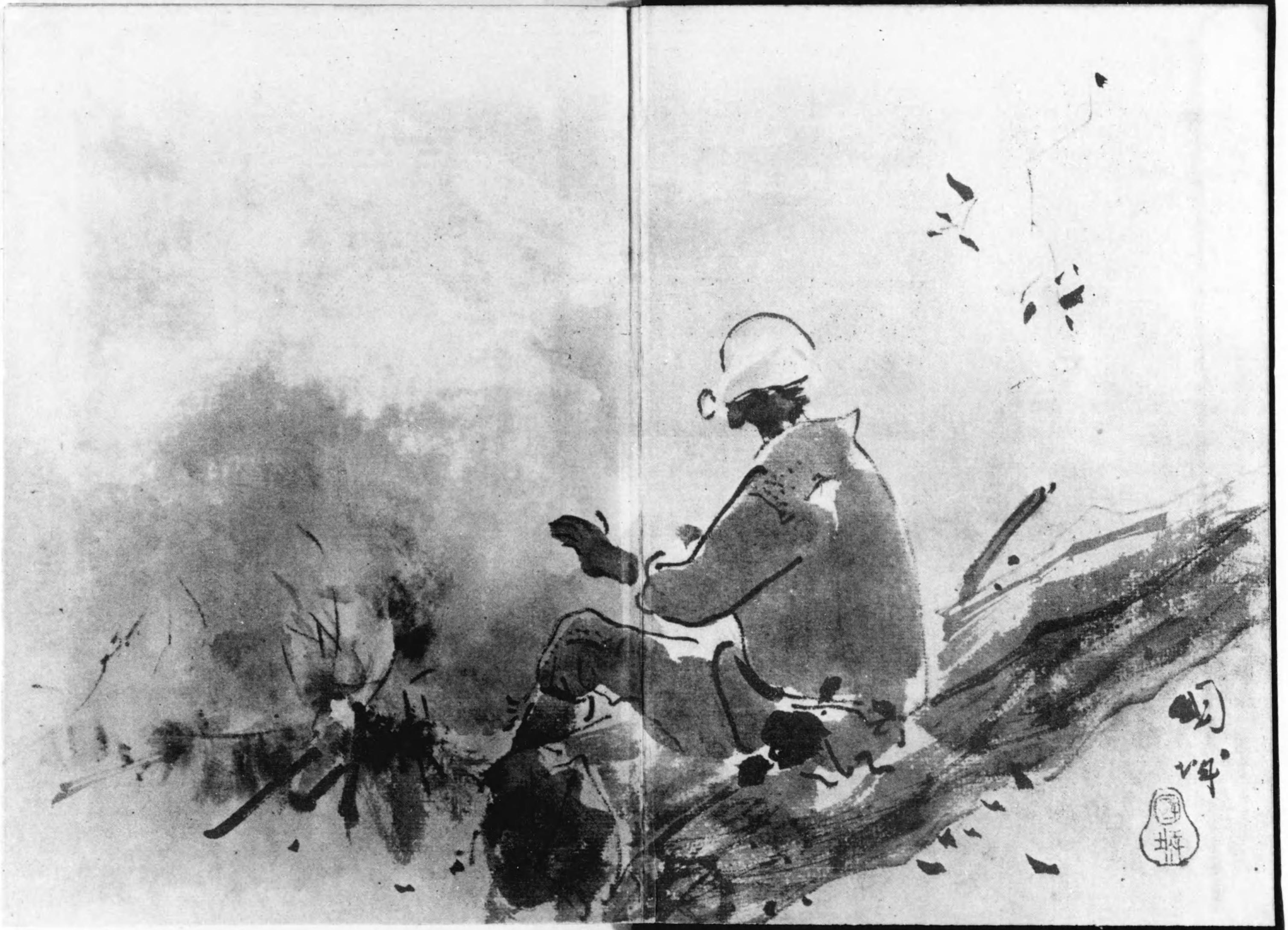
359
108

始



特232
473

帝國圖書館藏

多门

昭和九.七.一一
帝圖
内交

序

神戸雲母支社の諸君が相倚つて一巻の句集を出すといふ。これも亦結構なことである。俳句といふ文藝のしごと、斯のことは、表てに極くはかなげなことであるけれども、お互ひ心に包容するところは必ずしも然うではない。むしろ表てにはかなげな貌をもつてゐるだけ、内部に燃えてゐるところのものが熾烈であると云へる。ものにたとへて謂ふならば、火が燃えさかつてゐるしんがしろ〴〵とした炎を爲すやうなものであり、又、怒髪天を衝く境を超えた能面が持つやうな蒼白い怒り、さうした熾烈さがはりきつて沈んでゐるものである。だから、この沈痛な俳諧的生涯から他をながめるとき、或は苦笑にしか値しないところのものに往々にして出遭はす。同じ

文藝作の爲事でも、徒らに長時日と多くの筆墨を削つてする三文大衆文藝の長篇駄作の如きに對すると、生涯をつらぬく此方のたましひに於て、吹けば飛ぶやうな感じをさへうけることは眞率な態度をもつてかゝつてゐる俳人の誰もがさうあるところだらうと惟ふ。それが、自ら力足らずして、遂に三文長篇の駄文藝にも及ばぬ結果に終るべく餘儀なくせらるゝとき、その時こそ識者は飽くなき嘲笑を俳人その者にあびせかける。いたづらに尊大にして心唯奢る哀れなる者として葬られ終らねばならない。當然なことである。こゝのところを深く知るが爲めに、彼芭蕉のごときは慟哭の線を越えたのである。一笠一簔に身をやどして寸鐵を帶びず雨露風雪にさらされながら、血塊のごとく吐き出し吐き出した彼の詩は、鐵のやうに强く、花のやうにうるはしいその心臓からつながつて瞭らかな影を

とゞめてゐるのである。故に彼は苟も氣壓されなかつた。近代人心の彈力に於て、芭蕉を向ふに廻して輸贏を決せんとするものは蓋し少くないであらう。さういふ云ひかたが不可なかつたら、いつそ芭蕉輩をものともせず天晴れものめざましい超弩級作をたて續けに毎月何十句となく提示しやうとする大家が無數にあらうと思はれる。だが、みづからある大家意識はそこらの犬に喰はせてしまふとしてげにもお互ひは、過去の芭蕉は姑く過去の芭蕉としておいて、又、左樣に傑作を矢繼早に無數產む側は姑くそれとして措いて、まさに神も照覽あれとする作品に心をこめて一歩もおくれじとする藝術的良心の持ちあはせは斷じてなければならない筈である。

　而うした心構へに於て、お互ひが積日の努力になる制作をば、煙りのやうにかき消してはなくなさうとする者は誰も無いであらう。

弊履の如く捨てさつてかへりみないとするものが若しあつたとするならば、それは努力なきに若かざる痴呆の徒である。

神戸雲母支社の諸君が、諸君銘々の力作を輯して一卷の書冊たらしめんとすることがかならずしも世を席捲しやうとするまでの大望に因るものではないまでも、然も如上藝術的良心に鑑み忸怩たるところない心構へと用意とをもつて日頃制作的精進をつゞけつゝあつたことは私の若干はこれを知るところである。諸君の氣持が句集上梓の機にうごいて然るべしいことはさらにはつきりと心を打つものがあるのである。私は、とゝのへられたる一冊の稿本に對して、一つ〳〵再選の嚴正批判から、拙きは無遠慮におとして、神韻漂渺たるもののみ、或は數十句、或は十數句、或は數句をかゝげ、もつて快適な氣持に於て諸君に相まみゆることを知らないわけではない。

しかしながら、退いて此の句集の意味を又一面から考察するとき、諸君は諸君として屹度珠の如く大切に掻き抱くだらうことを推斷出來るとともに、ペルシャ猫をかきいだく貴夫人のやうに、自分自身の頬にばかり軟毛を觸らせて溶けるやうな微笑みと、くすぐつたい快感を味ふだらうことに違ひはない種類のものたることも可成りに肯ける、そこで私はこの稿本に對して、法外もない嚴選をほどこして、折角諸君の微笑みから快感から別離の哀感を催さしめざらんことに意を用ひた。その程度に選してあるのである。兎まれ、神戸雲母支社諸君がかゝる業績をのこすに至つたことは多とするに足ることであつて飽くまでその精進に贊意を表さなければならないところである。

癸酉春三月十五日

蛇笏

凡例

一、本句集は雲母創刊號より第十九卷第十二號（昭和八年十二月）に至る同誌『春夏秋冬』（昭和六年七月號以前は『雜詠』）『支社稿』『寒夜句三昧』及『珠玉抄』中の各自の句より更に蛇笏先生の再選を經たる八百五十二句を採錄したものである。

一、本句集の作家は神戸市及其附近に居住し又は嘗て居住せる左記の二十一名である。（下記年代は雲母へ初めて投句せる年月を示す）

寺村瓢々	大正八年五月	井關斗門	昭和五年一月
萩原露鳴	同十三年二月	志賀芥子	同五年一月
嶽墨石	同十四年五月	倉橋弘躬	同五年三月
倉橋白映	昭和二年十月	小出昭坡	同五年十一月
和田草史	同三年九月	山岡紫津女	同六年一月
岳りよ女	同三年十月	牛越進	同六年四月
中川曉雨	同四年十一月	安達雲濤	同六年八月

上田秋衣	昭和七年一月	鎌田壽人	昭和八年六月
大本天明	同七年一月	山中泖水	同八年九月
中原三石	同七年八月	貝谷圭一	同八年十一月
能登谷美都女	同八年三月		

一、各句の下には作者備忘の爲め夫々制作年代を附記した。『大』は大正、『昭』は昭和の年號を示す。

一、各句の配列順序は、句數の多き順により、同一句數の場合には年代順とした。

一、題字『水門』は蛇笏先生、見返しは國城畫伯の御揮毫による。記して心からなる感謝の辭を捧ぐ。

以上

目次

新年

時候 …… 三

正月 三―　松の内 三―　松過ぎ 三―

天文 …… 三

初日 三―　初空 四―　初凪 四―

地理 …… 五

初富士 五―

人事 …… 五

左義長 五―　飾 五―　初湯 六―　春着 六

若水 七
雑煮 八
寶恵駕 九
凧 七
羽子 八
傀儡 七
歌留多 八
鳥追 七
初詣 八

植物 …… 九
齒朶 九

春

時候 …… 一三
春日 一三
春の夜 一四
春寒 一四
暮春 一六
春曉 一三
朧 一四
春淺し 一五
春深し 一六
春の晝 一三
暖か 一四
春めく 一五
春 一六
春の宵 一三
うらゝか 一四
啓蟄 一五

天文 …… 一七

春月 一七
春の雪 一八
陽炎 一九
春風 一七
春雨 一八
花曇 一九
東風 一七
春光 一八
菜種梅雨 二〇
春雷 一八
霞 一九

地理 …… 二〇
雪解 二〇
春の水 二一
凍解 二〇
春泥 二一
春の谷 二〇
春の川 二一

人事 …… 二一
春愁 二一
初午 二二
彼岸 二三
畑打 二四
野焼 二五
競馬 二六
桑摘 二七
春眠 二二
水取 二二
開帳 二三
春火鉢 二四
種蒔 二五
鞦韆 二六
蠶飼 二七
野遊 二二
紀元節 二三
甘茶 二三
針供養 二四
入學 二五
雛 二六
櫻餅 二七
石鹼玉 二二
涅槃會 二三
耕 二四
出代 二四
競漕 二五
白酒 二七

動物 …… 二七

春の鹿 二八
春の鶯 二八
囀り 二八
鶯 二八
燕 二九
雲雀 二九
亀啼く 二九
蝌蚪 二九
蛙 三〇
蝶 三〇
蜂 三〇

植物 …… 三〇

柳 三〇
椿 三一
木の芽 三一
芹 三一
海苔 三一
土筆 三一
馬酔木 三二
若葉 三二
蘆の芽 三二
蕨 三二
菜の花 三三
櫻 三三
梨の花 三五
躑躅 三六
木蘭 三六
藤 三六
竹の秋 三六
豆の花 三七
紫雲英 三七

夏

時候 …… 四一

初夏 四一
薄暑 四一
半夏生 四一
文月 四一
水無月 四二
極暑 四二
暑さ 四二
短夜 四二
夜の秋 四二
涼し 四三
夏深し 四三
夏の果 四四
秋隣り 四四
夏 四四

天文 …… 四四

夏の日 四四
夏の月 四四
夏の星 四五
五月闇 四五
五月晴 四五
梅雨 四五
五月雨 四六
夕立 四六
喜雨 四七
薫風 四七
朝焼 四七
虹 四七
雷 四七
雲の峯 四八
炎天 四八
日盛 四八

地理 …… 四八

夏野 四八
青田 四八
土用波 四八
清水 四九
瀧 四九

人事 四九

勞働祭 四九
裸 五二
羅 五三
夏館 五四
扇 五五
打水 五六
端居 五七
燈籠 五八
水鐵砲 五九
麥笛 六〇
ビール 六一
祭 六二
墓參 六三
走馬燈 六四
帷 四九
汗 五二
夏羽織 五三
簾 五四
花氷 五六
曝書 五七
噴水 五七
流燈 五八
水機關 五九
水論 六〇
氷店 六一
雨乞 六二
門火 六三
七夕 五〇
更衣 五二
夏蒲團 五三
蚊帳 五五
蚊遣 五六
遊船 五七
泳ぎ 五八
魂送り 五九
池釣 六〇
水番 六〇
心天 六一
夜店 六二
送り火 六三
歸省 五一
浴衣 五三
日傘 五四
籐椅子 五五
行水 五六
納涼 五七
花火 五八
水中花 五八
田植 六〇
ソーダ水 六一
洗ひ飯 六一
キャンプ 六二
盆 六三

動物 六四

鹿の子 六四
浮巣 六五
金魚 六六
灯蛾 六七
蟻 六七
海月 六八
蝙蝠 六四
龜の子 六五
斑猫 六六
毛蟲 六七
蟬 六八
雷鳥 六五
蜥蜴 六五
螢 六六
百足 六七
蟷螂 六八
時鳥 六五
山女魚 六五
繭 六六
蛹 六七
夜光蟲 六八

植物 六八

餘花 六九
蓮 六九
一八 七〇
眞菰 七一
新樹 七一
若楓 七二
山梔子 七三
罌粟の花 七四
麥 七四
向日葵 六九
睡蓮 七〇
菖蒲 七〇
百合の花 七一
病葉 七二
沙羅の花 七二
實梅 七三
薔薇 七四
瓜 六九
河骨 七〇
藻の花 七〇
若竹 七一
常盤木落葉 七二
無花果 七三
蛇苺 七三
枇杷の實 七四
茄子 六九
あやめ 七〇
菱の實 七一
夏木立 七一
卯の花 七二
野茨 七三
百日紅 七三
花柘榴 七四

秋

時候 …… 七七

立秋 七七
秋冷 七八
秋の夜 七九
九月盡 八〇

初秋 七七
豊秋 七八
夜長 七九
暮の秋 八〇

秋暑し 七七
秋晩 七八
夜寒 七九
秋 八〇

新涼 七七
秋の暮 七八
秋澄む 八〇

天文 …… 八一

秋日 八一
宵闇 八三
鰯雲 八四
霧 八六
野分 八七

月 八二
星月夜 八三
秋晴 八四
露 八六

亥中月 八三
秋の空 八四
秋風 八五
天の川 八六

十六夜 八三
秋の雲 八四
秋雨 八五
颱風 八七

地理 …… 八七

秋の海 八八
秋の水 八八
秋出水 八八

人事 …… 八八

秋の燈 八八
障子洗ふ 八九
夜食 九〇
案山子 九一
秋祭 九二

秋扇 八九
秋灯 九〇
砧 九〇
鳴子 九一
茸狩 九二

秋鏡 八九
夜學 九〇
鹿火屋 九一
秋耕 九一

秋袷 八九
干雜魚 九〇
擣桶ずり 九一
新酒 九二

動物 …… 九二

鹿 九二
鶺鴒 九三
秋蚊 九四
蜻蛉 九五

渡り鳥 九二
鵙 九三
蓑虫 九四
蟲 九五

百舌鳥 九三
秋螢 九三
蜩 九四

鶉 九三
秋蝶 九四
法師蟬 九四

植物 …… 九六

初紅葉 九六
紅葉 九六
一葉 九六
松の實 九七

紫蘇の實　九七
葡萄　九八
栗　九九
コスモス　一〇〇
花梨　一〇一
鷄頭　一〇一
芒　一〇二
木犀　九七
棗　九八
新松子　九九
甘藷　一〇〇
草の花　一〇一
芭蕉　一〇二
櫨　一〇二
柿　九七
木患子　九八
草紅葉　九九
朝顏　一〇〇
鳳仙花　一〇一
稻　一〇二
芙蓉　九七
萩　九八
菊　一〇〇
龍膽　一〇〇
秋薔薇　一〇一
落穗　一〇二

冬

時候……………一〇五
冬凪　一〇五
冬の夜　一〇六
大寒　一〇六
大晦日　一〇八
冬めく　一〇五
寒さ　一〇六
行年　一〇七
春近し　一〇八
冬ざれ　一〇五
小春　一〇六
師走　一〇七
短日　一〇五
寒日和　一〇六
年の暮　一〇七

天文……………一〇八
時雨　一〇八
霰　一一〇
冬の日　一一一
冬の雨　一〇九
雪　一一〇
凩　一一二
霜　一〇九
冬晴　一一一
から風　一一二
冬霞　一一〇
冬空　一一一
北風　一一二

地理……………一一三
冬の山　一一三
冬の海　一一三
涸瀧　一一三
冬の泉　一一三
冬水　一一三

人事……………一一四
風邪　一一四
火事　一一六
懐爐　一一七
冬籠　一一七
褞袍　一一九
スキー　一一九
日向ぼこ　一二〇
夜番　一一四
焚火　一一六
屏風　一一七
煖房　一一八
重ね着　一一九
探梅　一一九
掛乞　一二〇
火鉢　一一五
年木　一一六
襖　一一七
冬帽子　一一八
竹馬　一一九
柴漬　一二〇
報恩講　一二〇
冬の灯　一一六
炭　一一七
爐初　一一七
足袋　一一八
スケート　一一九
嚔　一二〇
厄詣　一二一

年忘　一二一
歳の豆　一二一
餅花　一二一
年の市　一二一
寒念佛　一二二
寒施行　一二二
寒稽古　一二二
避寒　一二二
寒風呂　一二二
寒の灸　一二三
寒肥　一二三
寒紅　一二三
熱燗　一二三
寒玉子　一二三

動物……一二四

凍鶴　一二四
笹鳴　一二四
鳰　一二四
水鳥　一二五
鴨　一二五
千鳥　一二五
鴛鴦　一二五
梟　一二六
寒鯉　一二六

植物……一二六

茶の花　一二六
萬両　一二七
寒椿　一二七
寒薔薇　一二七
寒菊　一二七
落葉　一二八
散紅葉　一二八
冬木立　一二八
枯柳　一二八
破蓮　一二八
枯芝　一二九
枯芦　一二九

新年

時候

正月　正月の大和國原雪晴れぬ　白映　昭四

松の內　語り暮れし友親しさや松の內　瓢々　大一五

松過ぎ　松過ぎや窓の小雪に爐の埃　瓢々　大一〇

天文

初日　初日さす金堂の扉の柱影　墨石　昭五

おほわだの濤のりふねに初日かな　同　昭七

國つ神鎮り在す初日かな　白映　同五

初空

初空の山河静めて深雪かな　瓢々　大一〇

初凪

初凪の濱つゞきなる一の谷　芥子　昭八

初凪や松を飾りて舟の行く　雲濤　同八

初凪の岬に遠し濱やしろ　瓢々　同八

初凪や敷波の雲うすれそむ　三石　同八

初凪のふなべりによす浦曲波　紫津女　同八

地理

初富士

初富士や田子の浦人艤ふ　墨石　昭五

人事

左義長

いさゝかのとんどに親し兄弟　瓢々　大一五

飾

帆柱の高きに掛けし飾かな　芥子　昭七

大風に注連散つてあり庭祠　瓢々　同七

舷にからびてかゝる飾かな　墨石　昭七
降る雪のばら〱まじる注連飾　雲濤　同七

初湯

郷人の往き來ちらほら初湯窓　草史　昭七

春着

金銀の帯の刺繍や春小袖　瓢々　昭八
縫ひ上げし春着の袖の模様かな　同　同八
ひとり子のめぐみの饒き春着かな　曉雨　同八
宴果てゝ迫れる夜氣や春衣裳　天明　同八
手あぶりのほのかに紅し春衣裳　墨石　同八

若水

井華水夜陰の光もちにけり　草史　昭六

凧

凧の糸水田に浸きて上りけり　白映　昭三
いくつもの凧あがりゐる旅路かな　同　同八
切凧や吹き衰ふる草の風　草史　同四
畦草にもつれゐるなり凧の糸　斗門　同六
須磨浦や西に東にいかのぼり　墨石　同七

傀儡

くづをれて泣き入るさまの傀儡かな　紫津女　昭七

鳥追

鳥追や籬に拂ふ袖の雪　瓢々　大一三

雑煮　生さぬ子も一人まじりて雑煮かな　白映　昭五

羽子　清水の塔影こゆし羽子日和　墨石　昭六

あゆみ出てをさなの羽子を受けにけり　昭坡　同七

歌留多　月高く厠にありぬかるた會　白映　昭三

初詣　暗がりに鳴りゐる鈴や初詣　芥子　昭六

寶惠駕　寶惠駕に人垣つくる戸口かな　白映　昭四

寶惠駕紅提灯のともりたる　同　同五

一挺の褄たれてゐる寶惠駕　紫津女　同八

寶惠駕のゆられ通しに花簪　同　同八

植物

歯朶　裏白のからびて落つる二葉三葉　墨石　昭四

春

時候

春日　晝風呂にひたりて惜む春日かな　白映　昭四

春曉　春曉の汀にのこる汐木かな　白映　昭六

春曉のうろ憶へなる墓に出し　曉雨　同七

春の晝　住吉に憩へる兵や春の晝　白映　昭四

春の宵　春宵のうつり香匂ふ懐紙かな　弘躬　昭七

春宵や假寝の夢の淺からず　紫津女　同八

春の夜　春の夜の睡魔にまかす心あり　紫津女　昭八

朧　御詠歌や朧の家の七七忌　進　昭八

朧夜の提灯ゆるゝ牛車かな　天明　同八

暖か　あたゝかき金堂の扉に面をよす　墨石　昭五

うらゝか　天麗かにふるさと近くなりにけり　白映　昭五

春寒　春寒や寄進にありく跛僧　瓢々　大一〇

たま／＼の餘寒日和や庭を掃く　同　同一三

春寒や雲影うつる山の襞　同　昭七

春寒の垣に襤褸干す竹屋哉　同　同七

瀬戸の海旅せる人に春さむし　紫津女　同七

春寒やたしなむ紅の青光り　同　同八

春寒やいらで買ひたる髪のもの　同　同八

爐邊の猫涙ためゐる餘寒かな　墨石　同二

春寒や洗ひて白き繪の具皿　芥子　同八

春浅し　踏みあれし牧場の土や春浅し　草史　昭五

春めく　さゝ波の春めく水に擢入れぬ　紫津女　昭八

啓蟄　啓蟄や空地の雨に積み瓦　瓢々　大一一

啓蟄や机に落つる鳥の糞　弘躬　昭六

啓蟄や熊手にかゝる虫のあり　芥子　同六

暮春

逝く春の山を浮べて大河かな　曉雨　昭五

春盡くる水彷彿と入日かな　同　同六

春や逝く花屑土に似たるかな　露鳴　大一四

行く春の閑居に貼れる名刺かな　白映　昭六

ゆく春や水底の蝌蚪のあからさま　紫津女　同八

春深し

むらがれる遊園の徒や春深き　白映　昭七

春

悼内藤碧堂氏

魂おくる春ぬばたまの夜空かな　曉雨　昭八

天文

春月

春の月かゞめば土の匂ひかな　曉雨　昭八

春風

春風や京に出で行く八瀬の路　雲濤　昭七

春風や病みほゝけたるたばね髪　紫津女　同七

屋上の水禽の子に春の風　三石　同八

東風

東風吹くや暮るゝに間ある園作り　紫津女　昭八

聖日の窓あけてあり東風の吹く　同　同八

ベランダの東風にはばたく籠の鳥　弘躬　同七

東風の波しはみしはめる蘆邊かな　墨石　昭八

春雷

春雷や花商へる大館　草史　昭五

春雷や松にかくれて塔すこし　斗門　同六

春の雪

春の雪ちらり〱と東山　墨石　昭七

春雨

春雨やひねもす縫ふも久しぶり　りよ女　昭四

宵浅く春雨傘の行きかへる　紫津女　同八

春光

春光や裾風にたつ縁埃り　白映　昭三

霞

夢殿や斑鳩わたり春がすみ　墨石　昭四

春がすみ浮かみ出でたる松の峰　雲濤　同七

歸郷、芹石君と川代を逍遙す

夕霞む荒瀬に沿ふて二タ法師　草史　同八

陽炎

天の橋立

股のぞく人に臺石かげろへる　瓢々　昭八

花曇

うとまるゝ心抱く日の花ぐもり　紫津女　昭七

奈良

老杉に宮の靜かや花ぐもり　同　同七

睡蓮の瑞葉の色や花ぐもり　曉雨　同八

病窓に鳥籠吊りぬ花曇　同　昭八

落柿舎

そのかみの笠かゝりをり花曇り　白映　同六

菜種梅雨　海空の淡き茜や菜種梅雨　草史　昭七

地理

雪解　お針子にまぶしき雪解雫かな　草史　昭六

雪解や大方丈を開け放つ　同　同七

凍解　凍解の土かさみたる岩根かな　草史　昭五

春の谷　雨霧の底の径や春木谷　露鳴　大一四

春の川　船障子春の川波うつりつゝ　昭坡　昭七

春の水　繕ふて春水はしる筧かな　芥子　昭六

春水やなか〳〵寄らぬ泡二つ　同　同六

春泥　春泥に奉謝の米のこぼれけり　曉雨　昭七

驛前やネオン鏤め春の泥　瓢々　同八

人事

春愁　春愁の文ふところに忘られぬ　曉雨　昭七

春愁をしりそめて長きまつ毛かな　同　同八

春愁や法悦の目のたゞ涙　りよ女　同五

春愁の涙をやどす女かな　弘躬　昭七
春愁や憎むべくして仇ごゝろ　紫津女　同七

春眠

春眠のたりたる細き眠かな　白映　昭五
春眠を惜しむ顔あり陶工師　昭披　同七

野遊

野遊びの勞れたのしむ湯槽かな　曉雨　昭五

石鹸玉

石鹸玉わが身ゆらぎてはなれけり　進　昭八

初午

初午や石垣たかき邸の内　白映　昭六

水取

水取りの灯の流れたる奈良の森　雲濤　昭八

紀元節

雪晴れの山家小驛や紀元節　雲濤　昭八

涅槃會

金色の或は昏く寢釋迦かな　墨石　大一五

彼岸

彼岸會の次第書貼れる厨壁　斗門　昭六
彼岸會の鐘のきこゆる渡舟かな　芥子　同六
雨の中彼岸の鐘の鳴りつゞく　進　同八

開帳

金剛の四方四佛や御開帳　墨石　昭七

甘茶

汲む人を待つばかりなる甘茶かな　芥子　昭六

耕

日の塀に近きほてりや耕せり　草史　昭七

畑打

田打ち終へて馬鼻ならす月下かな　瓢々　大一〇

天鹽より稼ぎもどりて畑打　白映　昭五

春火鉢

トランプに占ふ戀や春火鉢　曉雨　昭七

佗びぬると人こそしらね春火桶　同　昭八

針供養

針箱の慣れたる艶や針供養　瓢々　大一〇

出代

出代りの廊下つめたうあるきけり　紫津女　昭八

野燒

歸省子に野燒の煙はろかかな　墨石　昭五

島燒くと松帆の浦を漕ぎ出づる　同　同七

薄烟上がるばかりの燒野かな　雲濤　同七

種蒔

ふか〳〵と水底澄みぬ種俵　墨石　大一四

種を蒔く人ちらほらと島日和　白映　昭六

種袋吊りて古りたる柱かな　芥子　同六

入學

入學子欣然として帽深し　白映　昭二

競漕

競漕や夕凪そめし須磨の浦　墨石　昭三

競馬　勢ひつれて馬たのもしき競馬かな　瓢々　大一五
　　　勝馬の高鳴る蹄あげにけり　芥子　昭八

鞦韆　鞦韆に夕満潮の奏べかな　墨石　昭四

雛　いき〱と細目みひらき古雛　墨石　昭二
　　古雛やまみゆかんばせみづ〱し　同　同四
　　金屏に影二タ柱内裏雛　同　同五
　　あたゝかき雛の部屋を通りけり　りよ女　同五
　　皺もつ手のはなれゐる雛かな　昭坡　同六
　　手伸して雛に瓔珞参らせぬ　瓢々　同八
　　ぼんぼりに有明顔の雛かな　曉雨　同八

白酒　たまゆらの頬の上氣やお白酒　曉雨　昭八

桑摘　桑摘の彼女の笠のまぎるべう　墨石　昭四
　　　摘桑の大きな籠に充てりけり　紫津女　同八

蠶飼　ふるさとの蠶飼の中の起居かな　墨石　昭六

櫻餅　ほのかなる葉の移り香や櫻餅　白映　昭六
　　　旅の灯に雨情親しも櫻餅　曉雨　同七

動物

春の鹿　奈良坂の日に飽く春の寢鹿かな　露鳴　昭六

春の鷲　春の鷲快々として眠りけり　墨石　昭五

囀り　囀りの遠くなりたる御堂かな　瓢々　大一五

囀りや小枝の影のゆるぎ見ゆ　雲濤　昭七

囀りや眞晝に下りし山の驛　美都女　同八

鶯　須磨寺

鶯や青葉の笛の厨子を閉づ　墨石　昭三

篁にうぐひす啼くや醍醐みち　同　同五

鶯や夕水明り藪透ける　露鳴　大一四

亡弟葬儀

雨寒く鶯啼くや埋葬す　草史　同八

燕　雲に飛ぶ燕のあり摩天樓　弘躬　昭六

雲雀　歸帆

揚雲雀聞えて淡路近からず　芥子　昭七

龜啼く　夕闇の生田の池や龜の啼く　雲濤　昭七

蝌蚪　曇天の白樺林や蝌蚪の水　墨石　昭五

蛙　夕蛙佛事を勤め終りけり　曉雨　昭五

蝶　つたひゆく與謝の渚の蝶々かな　墨石　昭六

蜂　蜂守にゆきかふ蜂の機嫌かな　墨石　昭七

植物

柳　芽柳に瀬田の唐橋古びたり　墨石　昭四

聖堂のヨハネの窓の柳かな　同　同七

夕月のまたき光りや猫柳　同　同七

青柳霞める池の晴れ初めぬ　雲濤　同八

椿　拾ひたる椿の花や蟻這へり　斗門　昭五

渡し守ることのひさしや椿咲く　芥子　同七

木の芽　野々宮の裏藪垣や芽立ちたる　墨石　昭二

木々の芽に濯ぎの水の豊かなる　美都女　同八

芹　蒼空のうつる手もとや芹の水　墨石　昭七

海苔　海苔掻女浪にさからひしばらくは　草史　昭五

土筆　昨今の丈を競へる土筆かな　弘躬　昭六

馬酔木

鐘樓の古びし四圍の馬酔木かな　墨石　昭三

護符うけて歸りの路や花馬酔木　雲濤　同八

こま〴〵と花をはじめし馬酔木かな　芥子　同八

若葉

雨あしの谷を降り來る若葉かな　斗門　昭五

蘆の芽

水明り芽蘆沈めて夕久し　露鳴　大一四

舟底の水あを〳〵と芽蘆かな　墨石　昭八

燒原やおびたゞしくも蘆の角　進　同八

蕨

萎れたる蕨をおきぬ山覓　草史　昭五

菜の花

菜の花に雨あししげき旅路かな　白映　昭四

花菜雨冷え〴〵として授業かな　草史　同七

櫻

故郷の花の盛りの遠忌かな　墨石　昭二

たぎつ瀬の花吹きつくる巖かな　同　同二

花守や潰ゆる篝見て立てり　同　同三

碧潭にたゞよひそめし落花かな　同　同三

夜の禽の泳ぐもありて花明り　同　同五

夜の鷺の舞ひひろごれり花の檻　同　同六

風わたる落花の幹にもたれけり　同　同六

大原三千院

磴の苔あを〳〵と落花かな　同　同七

花人に暗きうてなの觀世音　同　昭八
しつらへて焚くばかりなり花篝　白映　同五
えにしなき人と話すや花篝　同　同五
夜櫻に愁を秘めし面輪かな　同　同七
夜櫻もすぎたる京に泊りけり　同　同七
御手洗にうつろふ花の衣かな　同　同七
花漬や母ふるさとに老ひたまふ　同　同七
花人に谷谺する荒瀬かな　草史　同五
花時化の馬車の通れる表かな　同　同五
せゝらぎに暮れゆく溪の落花かな　同　同五
閼伽の水汲む山の井や花の冷え　同　同五
いさゝかの花時化見ゆる狹庭かな　同　同六

夜櫻や明るき茶屋を通り過ぐ　りよ女　同四
開帳や花の山門まのあたり　同　同五
吹かれ來る隣家の花を仰ぎけり　同　同六
玉垣につきたる雨の落花かな　進　同八
墓穴の水にたゝへし落花かな　同　同八
城内や花さむけれど人通り　曉雨　同八
夕冷えて霽るゝ氣配や山ざくら　同　同八
宿傘に仰ぐ伽藍や花の雨　瓢々　大一五
須磨寺や霞晴れゆく初櫻　雲濤　昭八

梨の花

梨の花咲く夕闇に話しけり　美都女　昭八
日洽く梨の花ちる葬家かな　草史　同八

躑躅　庭躑躅地に影投げて眞盛り　瓢々　大一四

木蘭　白木蘭の殘り少なに日和かな　草史　昭四

藤　崖藤にあさひあまねし山の池　瓢々　昭七

竹の秋　翔り行く白鳥見ゆる竹の秋　雲濤　昭八

音立てゝ夕雨しげき竹の秋　同　同八

高千穗の峰は霞みつ竹の秋　同　同八

竹秋や雨の後なる無緣塚　草史　同六

豆の花　霧ながら薄日さしたり豆の花　露鳴　大一五

聖德太子誕生所、橘寺途上

紫雲英　げんげ摘む久米の子らはも太子道　墨石　昭四

夏

時候

初夏　灯の街に初夏の豪雨のいたりけり　草史　昭七

天井のひくき假屋や夏に入る　弘躬　同八

薄暑　物賣の呼ばはる聲も薄暑かな　紫津女　昭七

川風に厦なみたかき薄暑かな　白映　同七

半夏生　降り足らぬ雲の動きや半夏生　曉雨　昭六

文月　文月や御榊のはや枯れそめし　三石　昭八

水無月　笛歇んで水無月の夜の更けにけり　紫津女　昭八

極暑　火葬場関然として極暑かな　草史　昭六

暑さ　陵の井に口嗽ぐ暑さかな　白映　昭四

身にそはぬ暑き戎衣や老兵士　同　同五

短夜　短夜の車夫提灯や籠の上　草史　昭六

夜の秋　夜の秋の月初更なる砂丘かな　草史　昭八

涼し

元町所見

寶石に灯の涼しさよ飾り窓　曉雨　昭七

葛の雨玻璃戸涼しく透きにけり　同　同八

八重むぐら夕涼の露生れけり　同　同八

ふるさとの夜涼に人を戀ひにけり　草史　同七

洗ひ桶かけ干す茶屋や山涼し　瓢々　同八

月ありて夜涼の町の溫泉坂かな　進　同八

亡母の通夜

すや／＼と夜涼の床の佛かな　墨石　同八

夏深し　夏深き芝生に雨の過ぎにけり　草史　昭六

夏の果　夏惜しむ唯一峰に雲の険　露鳴　大一三

須磨浦や男波女波に夏惜しむ　曉雨　昭八

秋隣り　障子開けて青嶺親しや秋隣り　曉雨　昭七

夏　夏病んで夜も晝もなく眠りけり　美都女　昭八

天文

夏の日　烈日に常山木の枝の雀かな　草史　昭八

夏の月　夏の月うかぶ神田のほとりかな　白映　昭五

更けたけし榻を求めて夏の月　同　同五

夏の星　星涼し手摺にかけし汗のもの　紫津女　昭七

五月闇　燈臺の灯のかすかなる五月闇　雲濤　昭七

五月晴　行幸待つ茅の浦田や五月晴　白映　昭四

梅雨　田に入るゝちよろ〳〵水や梅雨の月　草史　昭五

うす〳〵と梅雨の月さすお通夜かな　同　同六

銅蓮をあふるゝ水や梅雨の月　同　同六

山龕の大いなる灯や梅雨曇り　同　同八

梅雨晴れや松の上なる氣象臺　墨石　昭二
梭の音川を隔てゝ梅雨の宿　芥子　同七
梅雨雲の押し迫りたる山の果て　秋衣　同七
傘さして梅雨の田に立つ農夫かな　三石　同八
水汲むや鷄舍も畑も梅雨ぐもり　紫津女　同八

下宿生活

梅雨合羽かけて假屋の柱かな　弘躬　同八

五月雨

五月雨や蒼みかゝりし手水鉢　りよ女　昭四
五月雨や昏きになれてお內陣　墨石　同五
五月雨の流れとなりて松落葉　雲濤　同七

夕立

夕立晴れて光りまばゆきヨットかな　三石　昭七

喜雨

ビルデイング晝を灯せり喜雨の中　瓢々　昭八

薫風

長男食初の式として須磨海岸の美しき石を供ふ

薫風や五色の石も膳の景　墨石　昭四

朝燒

朝燒やひく山水に甕鳴れる　草史　昭五

虹

夕晴れや虹玲瓏と法界寺　墨石　昭五
夕虹や學究の眼のたのしめる　同　同七
虹立つや夕餉の卓について見る　りよ女　同三
うす〳〵と虹かゝりたる渡舟かな　白映　同六

雷

雷鳴に曉晴れし山家かな　瓢々　大一四
雷遠く藻草に波のなくなりぬ　芥子　昭六

雲の峯　海へまで一筋道や雲の峯　草史　昭四

炎天　炎天や扉の蝶は線となる　墨石　昭七

日盛　日盛りに畝ほろ〳〵と崩れけり　芥子　昭八

地理

夏野　夏野路の雨に濕へる館かな　瓢々　大一〇

青田　月の靄拂ふ風出し青田かな　曉雨　昭七

土用波　潮吹ける鯨に渺と土用波　弘躬　昭七

清水　口づける清水眞底の美しき　墨石　大一四

ごく〳〵と香にむせび飲む清水かな　白映　昭五

瀧　瀧茶屋に隣る淫祠も覗かるゝ　墨石　昭三

人事

勞働祭　メーデーの船出づるよりやゝ荒るゝ　昭坡　昭八

泊船をめぐりて海の勞働祭　同　同八

幟　初幟押し立つ竿のあを〳〵と　墨石　昭四

たゝみ置く眼の大いなる鯉幟　昭坡　同七

鯉幟もつ手離れて上りけり　白映　昭八

七夕

七夕や更けたる星座仰がるゝ　草史　昭四
吹き晴れて七夕竹に照る陽かな　同　同五
吹きあらぶ七夕竹や濱館　同　同五
屋根近く下り來し星や星祭り　墨石　同三
眞夜中の七夕竹のそよぎけり　同　同六
七夕や供物の戻る深廂　りよ女　同四
いとし子の初七夕の夜となりぬ　露鳴　同五
星祭る艫に夕の來りけり　芥子　同六
雨にぬれて七夕色紙あぢきなや　瓢々　同七
星祭るこま〲母の願ひごと　紫津女　同八

歸省

歸省子にくにばら遠き青嶺かな　墨石　昭三
山馬車にゑひ心地なる歸省かな　同　同五
郭公の山あを〲と歸省かな　同　同六

七月五日信州の故郷に半身不隨の母を見舞ふ（四句）

歸省子に寢釋迦のごとく母います　同　同八
歸省子や病臥の母のふところに　同　同八
歸省子にみとりの姉も老いにけり　同　同八
歸省子に灯る故人皆わかし　同　同八

八月二十一日母重篤の招電により急遽歸省するも
一足遅れにて遂に母の臨終に逢へず（二句）

歸省子に母の御手のまだぬくき　同　同八
歸省子に母の死顔は見えずなる　同　同八

裸

帰省して舊知に遭へる夜店かな　秋衣　昭八

勤行の鉦たゝきゐる裸かな　芥子　昭八

朝より机に向ふ裸かな　同　同八

裸子に甘き厨の西瓜かな　墨石　同八

汗

父歐洲へ旅立つを見送りて

汗の手の鞄渡して別れけり　白映　昭五

汐焼けに面はゆげなる乙女かな　弘躬　同六

更衣

少年の日をなつかしみ更衣　曉雨　昭八

浴衣

そゞろ出し夜道に宿の浴衣かな　秋衣　昭七

糊つよく煙霞心地の浴衣かな　雲濤　同七

羅

藥師寺東院堂

うすものゝ聖觀音の御はだへ　墨石　昭五

もろ乳のふくらみもちて綾羅かな　紫津女　同七

夏羽織

杏南子氏全快を祝す

句をおもふ人目出度さよ薄羽織　曉雨　昭六

夏蒲團

撥ねかへす幼なの足や夏蒲團　白映　昭五

墨石氏庵
寝落つ子によき父のあり夏蒲團　曉雨　昭六

日傘
突堤に別れ惜しめる日傘かな　瓢々　昭六

夏館
外人邸
門前の松に名札や夏館　弘躬　昭六

簾
あけくれの獨りに古りし簾かな　曉雨　昭六
大河の雨に灯りぬ船すだれ　同　同八
洗ひ干す古簾に夏の匂ひかな　同　同八
松籟の中の別墅の簾かな　斗門　同五

月影やすこしみだるゝ青簾　芥子　同八

蚊帳
蚊帳吊つて古き世帯となりにけり　白映　昭六

籐椅子
籐椅子を離れて佇ちし汀かな　白映　昭四
くらがりに置きすてゝある籐椅子かな　同　同五

扇
とり出して俄に配る團扇かな　芥子　昭七
いたつきの腕動かす團扇かな　同　同七
唐めきて孔雀の團扇かゝりけり　墨石　同六
嬌笑をのぞかせてゐる羽根扇　弘躬　同八

花氷　花氷花をあらはに夕づきぬ　昭坡　昭八

蚊遣　僧院の蚊火の煙や誰も居ず　瓢々　大一三

ねもごろの添乳の妻や蚊遣香　同　同一四

がつくりと蚊遣の灰のくづれけり　白映　昭六

行水　行水の湯を足す妻が裸かな　墨石　昭二

行水やアカシヤの陽の強けれど　草史　同七

行水や岐阜提灯の軒浅く　雲濤　同七

打水　打水のすみたる庭へ戻りけり　三石　昭八

水打つて淡路は低く灯りけり　美都女　同八

曝書　傳へたる一巻曝す系統譜　白映　昭七

遊船　遊船や湖水に浸す皿小鉢　壽人　昭八

納涼　住吉は松の闇なる涼みかな　白映　昭五

舟涼み音なく潮の満つるかも　曉雨　同五

納涼に雨餘の帆船ゆたかなる　草史　同七

深ひさし月さしそめし涼みかな　芥子　同八

端居　ふるさとの端居たのしむ夕べかな　白映　昭五

噴水　噴水の玉流るゝや水の上　草史　昭六

泳ぎ　夕泳ぎ廣告塔は灯りそむ　墨石　昭二

遠泳に浦の松風かなでけり　同　同六

杖おいて座頭もすなる汐浴び　弘躬　同六

一の谷水着の娘らの歩きけり　りよ女　同七

花火　流れきて眞上となりし花火かな　芥子　昭七

燈籠　門内の樹々のふかさや盆燈籠　瓢々　大一四

婢女の灯をともし去る燈籠かな　紫津女　昭七

流燈　流燈に照らされて浮く盆供かな　墨石　昭八

漕ぎ出でゝ炎の水尾ながし精靈舟　同　同八

突き出すや灯籠波に乗り戻る　曉雨　同六

更くる夜の波間に殘る精靈舟　雲濤　同八

見えてきて流燈の炎の細さかな　芥子　同八

魂送り　齊經に更けしランチや魂送り　草史　昭六

水中花　水中花片寄り暮情こまやかに　露鳴　大一四

水鐵砲　水鐵砲桶のそこひにころがれる　白映　昭二

水機關　子らに鳴る水からくりはきらびやか　墨石　昭七

暗がりに水からくりのつゞきけり　芥子　同七

池釣　池釣りの泛子が二つになりて見ゆ　芥子　昭七
ゆるやかに釣掘の水流れ居り　同　同八

田植　佐登りやよきあんばいに雨ぞ降る　雲濤　昭七

法隆寺途上
麦笛　麦笛や松の古道吹き通る　墨石　昭四

水論　水論に迎へられたる老師かな　白映　昭四

水番　水番に月出て迅き流れかな　草史　昭五

ソーダ水　顔上ぐる瞳の笑ひ居りソーダ水　暁雨　昭六
灯を戀ふて歩き疲れぬソーダ水　同　同六

ビール　夜の瀧さゝら〳〵とビヤホール　昭坡　昭八
石菖にあそぶ蝿ありビヤホール　同　同八

氷店　海風に簀の落ちぐせや氷店　紫津女　昭七

心天　心天あとずさりゐる筧水　弘躬　昭六

洗ひ飯　俳諧に生きて悔なし洗ひ飯　白映　昭五
乾飯に浄坊ひそとありにけり　同　同六

祭

地車の屋根の大幣清らかに　瓢々　昭七
幕打つや祭の日和仰ぎつゝ　同　同七
祭提灯瞬き合へり問屋町　同　同八
海へむく住吉末社祭りかな　白映　同五
霽れの樹の闇ふかし夏祭り　紫津女　同七

雨乞

雨乞の餘盡を守るや山の月　草史　昭五

夜店

みづ〳〵し植木の市の灯れる　白映　昭五

キャンプ

湖の上に月まどかなるキャンプかな　白映　昭六

墓参

病妻のはやもかゞめる展墓かな　墨石　昭三
暁のむらさめ過ぐる墳墓かな　暁雨　同七
花桶に霧雨こむる墓参かな　露鳴　同八
子に縁のなき姉老いし墓参かな　芥子　同八

門火

よす顔をさびしとおもふ門火かな　進　昭八
飛石にゆらぎて門火揚りけり　同　同八

送り火

送り火ややがて消えたる草の闇　瓢々　大一四

盆

縷々として哀れをあげぬ盆詠歌　紫津女　昭七

走馬燈　はこばれし冷たきものや走馬燈　白映　昭六

動物

鹿の子　水に浮く餌に首のべて鹿の子かな　草史　昭五

蝙蝠　起重機の海の暗きに蚊喰鳥　墨石　昭八

蚊喰鳥ドックのボイラ火を落す　同　同八

明石公園
月上げて小さき城や蚊喰鳥　暁雨　同六

神戸港風景
店先にみち來し潮や蚊喰鳥　草史　同七

雷鳥　雷鳥や雲あしはやき尾根つゞき　雲濤　昭七

時鳥　山家の戸雨月に閉ぢぬ時鳥　露鳴　大一三

浮巣　夕映の波たゝみくる浮巣かな　草史　昭八

龜の子　龜の子や縛り提げたる紐の端　瓢々　大一一

蜥蜴　蜥蜴出てころがり遊ぶ巖かな　墨石　昭五

山女魚　山女魚釣木がくれゆきぬ室生みち　墨石　昭六

金魚　灯れば卓に移しぬ金魚玉　白映　昭五
一槽に藻のあを〱と金魚市　昭坡　同七

斑猫　尼寺へ上る小徑や道おしへ　白映　昭五
陽かげりて斑猫の色濃くなんぬ　芥子　同六

螢　指頭より翅廣げたつ螢かな　墨石　大一五
更くる夜の橋下いざよふ螢かな　草史　昭四
霧ふけばたちまち青し螢籠　進　同八

繭　繭賣りて心安らになりにけり　芥子　昭六

灯蛾　夏虫や僧に持戒の勞れあり　曉雨　昭五
公園のひそと更く灯や灯取蟲　秋衣　同八
灯を襲ふ大いなる蛾のものめきて　紫津女　同八

毛蟲　毛蟲燒く枝に中てゝ濃き炎かな　草史　昭六

百足　看經や障子に這へる大百足　瓢々　大一三

蠅　墨すれば嘗めて遊べる庵の蠅　墨石　昭五

蟻　大粒の雨落ちそめぬ蟻の塔　草史　昭五

蟬　初蟬や高野はおほき墓所　白映　昭四
水草に蟬の落ち鳴く池亭かな　草史　同五
明け暮れの古き賽路や蟬時雨　雲濤　同八

蟷螂　泉石や萩より下りし子かまきり　墨石　昭二

夜光蟲　釣人に更けたる浪や夜光蟲　草史　昭五

海月　蒼海に笠かたむけて海月かな　墨石　昭四

植物

餘花　嵐峽の餘花に棹さす屋形船　紫津女　昭七

向日葵　向日葵に瑠璃の日輪耀けり　墨石　昭七

瓜　一ト叢の瓜の葉かへる夜風かな　進　昭八

茄子　冷泉につけてきゆツ〳〵と茄子洗ふ　壽人　昭八

蓮　蓮の花ことに夕映ゆ芦間かな　草史　昭七
草刈るや蓮の花はさかりにて　同　同八
ぬきんでゝ眞菰の中の蓮かな　同　同八
水幽み蓮花筆をあげにけり　同　同八

睡蓮　睡蓮や鳳凰堂の柱影　墨石　昭四

縣廳の睡蓮の庭ひそとして　三石　同八

河骨　河骨の色眞青なる蕾かな　白映　昭四

あやめ　ふるさとやあやめ花さく草の中　墨石　昭六

一八　一八や風を眞受けの厠窓　瓢々　大一四

菖蒲　林泉に流るゝ水や花菖蒲　墨石　昭六

藻の花　藻の花に西浪強く日照雨たり　草史　昭七

夕焼けの雨すゞろなる花藻かな　曉雨　同七

菱の實　菱とりや雲影もなき水の上　曉雨　昭七

眞菰　まこも刈る水の匂ひをたのしめり　草史　昭八

百合の花　百合の香に咽びて花瓶移しけり　曉雨　昭五

若竹　若竹や牧舎の簷の深からず　草史　昭八

夏木立　白鳥に水平らかや夏木立　曉雨　昭八

新樹　雲の上を行く雲はやき新樹かな　秋衣　昭八

亡弟葬儀

葬場の新樹の雨に歩を移す　草史　昭八

病葉　病葉の水白日に廣うして　曉雨　昭五

常盤木落葉　深山路や風すゞろなる夏落葉　露鳴　昭六

松葉ふる水のくもりや銀閣寺　曉雨　同七

卯の花　手巾干す卯の花垣や庭の風　瓢々　大一〇

若楓　參詣のときたまくるや若楓　白映　昭七

沙羅の花　老鹿に沙羅の花ちる夕まぐれ　曉雨　昭七

沙羅の花ちる夕風の社頭かな　同　同八

無花果　無花果の一つ殘りし葉陰かな　壽人　昭八

野茨　野茨のこぼるゝばかり牆の外　紫津女　昭七

山梔子　山梔子や名殘りの雨のこまやかに　草史　昭七

實梅　青空の見えて雨ふる實梅かな　曉雨　昭六

蛇苺　石切りの下り來る徑や蛇苺　斗門　昭五

百日紅　蛋が戸や今を盛りの百日紅　雲濤　昭八

罌粟の花	罌粟に病む智慧しづかなる眉目かな	美都女	昭八
薔薇	握りたる土のぬくみやばら移す	曉雨	昭六
	露の瑠璃風に遊べる薔薇かな	露鳴	同七
枇杷の實	枇杷の實の色づきそめし島便り	美都女	昭八
花柘榴	新らしき傘の匂ひや花柘榴	草史	昭四
麥	麥唄や天涯高く日渉れる	露鳴	昭六
	丹波路や雨の中なる麥の秋	三石	同八

秋

時候

立秋　今朝秋や淫祠の藪の晴やかに　墨石　昭二
　　　曉近く眠る恙や今朝の秋　同　同三

初秋　初秋や濃紫なる畦鴉　露鳴　大一四

秋暑し　道の邊の竹に夕陽や秋暑し　草史　昭六

新涼　新涼の濡緣におく漁のもの　紫津女　昭七
　　　秋涼し狹庭の雨に竹床几　瓢々　同八

新涼や石の上にある忘れ物　天明　昭八

秋冷

秋冷や衣ときかくるみだれかご　紫津女　昭八

豊秋

蛯笏先生に随伴して大和の古寺に詣づ

豊秋の大和くにばら尾根かすむ　墨石　昭五

豊年や父に代りて神参り　飄々　同七

秋暁

揚子江

秋暁の濤間に映ゆる戎克かな　弘躬　昭七

秋の暮

島のある沼ひろ〳〵と秋の暮　白映　昭六

塔の雲仰ぎ居るなり秋の暮　墨石　同七

掃き清む秋も暮なる御陵かな　弘躬　同七

白河の長き流れや秋の暮　雲濤　同八

秋の夜

雨もりに翳す灯ほそし夜半の秋　墨石　昭六

長久鶴松氏逝去

逢ふ折もなくて訃をきく秋夜かな　草史　同六

夜長

船窓の月に目覚る夜長かな　弘躬　昭八

夜寒

眼かしらに夜寒の涙たまりけり　斗門　昭六

部屋〳〵を閉めて夜寒の廊下かな　秋衣　同八

秋澄む

澄む秋のぬかご零るゝ垣根かな　曉雨　昭八

秋澄める港の船に夜は來ぬ　三石　同八

嵐峽や秋澄む水のふかみどり　紫津女　同八

九月盡

みち汐に募りし風や九月盡　白映　昭五

暮の秋

行秋や城趾に鎖せし一茶亭　白映　昭三

晩秋の園に培ふいとまかな　同　同五

逝く秋や疏水の水のゆたかなる　紫津女　同八

秋

街路樹の風も秋なる夜空かな　草史　昭五

小豆島

道の邊に杖賣る子等や島の秋　同　同五

奈良

木の洞に置ける幣や古都の秋　同　同五

料亭二葉にて

裏に見る阿彌陀ケ池に秋の塔　三石　同七

茶を積める荷車乘せて秋渡舟　同　同八

下り立ちし厨に秋を知る身かな　紫津女　同六

天文

秋日

金堂のぬぎたる沓に秋日かな　墨石　昭六

山廬

眞向ひに秋日なじみぬ庭祠　墨石　昭七
馬市に群がる鶏や秋日影　瓢々　大八
船窓に飛沫はげしき秋陽かな　草史　昭七
腰かけし石のほとぼる秋日かな　雲濤　同八

月

月見衆大淀べりに一トたむろ　白映　昭二
陵守の庭を借りたる月見かな　同　同五
ひえ〳〵と月のかゝれる伽藍かな　同　同八
上人の假りの枕や松の月　瓢々　大一五
鱗雲たちまち消えぬ月の秋　同　同一五
ひろ〳〵と月出でにけり一の谷　草史　昭七

林檣や秋かすみせる月をあぐ　同　同七
月明や石磊塊と山の庵　墨石　同五
峡の家遅き月塊さしにけり　紫津女　同八

亥中月

亥中月すさまじき雲かゝりけり　紫津女　昭八

十六夜

いざよひも曇りて更けし須磨の浦　圭一　昭八

宵闇

丹波草史庵
宵闇の四山の迫る庵かな　曉雨　昭七

星月夜

筧鳴る片藪みちや星月夜　美都女　昭八

秋の空

飛鳥野や凧の揚れる秋の空　墨石　昭六

秋の雲

塔高く動く氣配に秋の雲　草史　昭四

七堂に高々とあり秋の雲　墨石　同六

鰯雲

高々と渉れる月や鰯雲　曉雨　昭六

秋晴

秋晴や道標ある芭蕉塚　白映　昭二

秋晴や沖つ島山平かに　墨石　同四

琴平宮

大いなる傘下の店や秋日和　草史　同七

秋晴や志賀の徑は蘆がくる　芥子　同八

秋風

村の青年某救濟工事中自らのダイナマイトに斃る

抱かれて首がつくりと秋の風　進　昭八

秋雨

刈萩の葉蒼し秋の雨　墨石　昭四

法隆寺歩廊

秋雨や櫺子の外の薄紅葉　同　同五

祖母八十二歳にて逝く（二句）

かへり見る野邊の送りや秋の雨　白映　同四

秋霖や電報うけし格子口　同　同四

旅装解く秋の豪雨となりにけり　草史　同六

秋霖や花賣の荷のそぼ濡れて　紫津女　同七

霧

霧はれて日影あまねき林かな　草史　昭七
深霧に水の乏しき筧かな　同　同七
あかつきの霧吹き罩むる井筒かな　同　同七
芋畦や朝霧の菊一トところ　露鳴　大一四
加茂川の狭霧に群るゝ鴉かな　りよ女　昭五
松深く残れる霧の動きけり　暁雨　同六

露

白露や茄子畑に日をむかふ　りよ女　昭四

長男食初式
食初の箸を立てたる石の露　墨石　同四
朝露にまみれて禽の骸かな　白映　同八

天の川

厠出て更けしとおもふ銀河かな　美都女　昭八

颱風

泊船に眞闇の海や颱風來　墨石　昭八
颱風來艀の子等は舟底に　同　同八
おほわだの颱風去つて日の出かな　同　同八
艫襲ふ颱風聲をあげにけり　芥子　同八
颱風に憑かれし船のともりけり　同　同八
防波堤大潮けむり颱風來　瓢々　同八
颱風に港の月の大いなる　同　同八

野分

草の果ひとつ家灯る野分かな　斗門　昭六

地理

秋の海　風強き展望臺や秋の海　瓢々　昭七

秋の水　亂杭の影の青さや秋の水　草史　昭四

金堂のほとりの水の澄みにけり　墨石　同五

水車音傳ふ秋水來て去りぬ　芥子　同八

秋出水　橋にたつ大高張や秋出水　白映　昭五

炭窯の中を通へる出水かな　草史　同六

人事

秋の幮　おばしまに干し擴げたる秋の幮　瓢々　昭七

秋扇　あるがまゝに書架の上なる秋扇　瓢々　大一四

秋鏡　母に似て蒲柳の眉や秋鏡　曉雨　昭八

秋袷　松葉杖に縋り嗽ぐや秋袷　瓢々　大一一

秋袷枳殼に袂曳かれけり　泇水　昭八

障子洗ふ　障子貼つて慈顏の佛灯しぬ　草史　昭六

うらやすの海女の洗へる障子かな　曉雨　同八

障子洗ふ流れに月の見え初めぬ　雲濤　同八

長男齒生ゆ

秋灯　秋灯や笑へば白き齒の一つ　墨石　昭四

秋灯に寝るともなく手枕す　紫津女　同八

夜學　より添ひてひともし暗き夜學かな　芥子　昭七

遲れじと夜學の包抱きけり　同　同七

干雑魚　うらやすの蜑の干すなる雑魚莚　紫津女　昭八

夜食　殘業の埃の中に夜食かな　三石　昭八

砧　月の面へひゞかせてゐる砧かな　芥子　昭八

鹿火屋　明星のきらめきそめし鹿火屋かな　白映　昭七

擔桶ずり　擔桶(タゴ)ずりの提灯松に吊られけり　草史　昭六

註　タゴズリは猪威の一種にして擔桶を木棒にてすり猪を威すその音狼の聲に似たり。

案山子　吹き降りとなりたる粟の案山子かな　曉雨　昭六

住吉の神居の畦の案山子かな　墨石　同七

鳴子　山晴れによくなる鳴子ひきにけり　瓢々　大一四

遠なりになり移りたる鳴子かな　白映　昭二

秋耕　秋耕にいそしむ若き夫婦かな　白映　昭二

新酒　麗人の頬なやましき今年酒　弘躬　昭七

秋祭　野も果ての家いさゝかや秋祭　白映　昭六

茸狩　茸狩の遊女が洗ふくびすかな　墨石　昭四

動物

鹿　鹿啼けば鹿をあはれみ旅枕　墨石　昭七

渡り鳥　燈臺の濤風あらき渡り鳥　弘躬　昭七

百舌鳥　奈良春日野
百舌鳥啼くや春日の杉の穂枯れたる　墨石　昭四

鵯　鵯啼くや雨うちけぶる松林　草史　昭七

鶺鴒　鶺鴒や平等院の石だゝみ　雲濤　昭七
せきれいや夕映えしたる園の雨　曉雨　同七
塔影の池静けさや石叩　弘躬　同七

鯊　ひた〳〵と障子つかりぬ鯊の汐　墨石　昭七

秋螢　たゞ一つ汐とぶ秋の螢かな　草史　昭五

秋蝶

葉を歩りく秋蝶風に落ちにけり　芥子　昭七

秋蚊

脚一つ足らで這ひゐる秋蚊かな　芥子　昭七

秋の蚊に襲はれてゐる面ヶかな　昭坡　同八

蓑虫

蓑虫に月の白雲磊嵬と　露鳴　昭八

蜩

蜩や木の間につきし案内燈　白映　昭三

かな〳〵や書院につゞく甃　瓢々　同八

法師蟬

法蟬師をちの弱音や一の谷　墨石　昭四

照りかへす庫裡の夕陽や法師蟬　瓢々　同八

蜻蛉

たぎつ瀬の虚空にむるゝ秋津かな　墨石　昭七

露の凝る枝を舞ひゐる蜻蛉かな　雲濤　同七

湖に出てひくゝなりゆく蜻蛉かな　昭坡　同七

とんぼうに日はさやかなる山路かな　曉雨　同八

蟲

草庵の四方の障子や蟲しぐれ　墨石　昭三

金堂の礎石に蟲も名残かな　同　同五

蟲きくや眠りたる子の抱きおもり　白映　同五

露の蟲志賀の漣奏でけり　露鳴　同八

蟲の緣木がくれ月のありにけり　曉雨　昭八

植物

初紅葉

霖のあがる翠微や初紅葉　墨石　昭六

紅葉

藥園の一とむらはやき紅葉かな　草史　昭六

箕面天狗の鼻

仰ぎゐて紅葉の日に醉ひにけり　曉雨　同七

一葉

さわやかに殘りて高き一葉かな　白映　昭七

山川の日をかへしつゝ一葉かな　曉雨　同七

松の實

松の實の吹かれておつる浪間かな　草史　昭六

紫蘇の實

紫蘇の實の枯れし香してこがれけり　草史　昭六

木犀

木犀の香に新らしき門構へ　瓢々　昭七

柿

柿を捥ぐ竹棹の露しごきけり　草史　昭六

吊したる四簷の柿のみな甘き　墨石　同八

芙蓉

かはたれの月影のある白芙蓉　曉雨　昭七

芙蓉咲く雨月明りの芝生かな　同　同七

葡萄

山廬近傍

旅人に葡萄の蝿の飛びにけり　墨石　昭七

棗

牧柵にかたぶく雨の棗かな　草史　昭六

木患子

木患子の膚傷けし梯子かな　瓢々　大九

萩

夕日照雨萩を亂して過ぎにけり　曉雨　昭六

凭るとにもあらぬ机の萩散りぬ　同　昭七

水甕につけてたわゝや束ね萩　瓢々　大一四

萩の葉を抱へし蜘蛛のうすみどり　りよ女　昭四

萩茶屋の水豊なる筧かな　斗門　同六

栗

栗ほして日影あまねき山家かな　草史　昭四

栗焼くや舌頭すでに句を得たり　白映　同四

蘆花先生の墓に詣ず

奥津城や供物の栗の十粒ほど　りよ女　同四

草浅く落ちてはじけぬ栗の毬　美都女　同八

新松子

曉をなべてしづくす新ちゝり　曉雨　昭七

草紅葉

青竹の垣結ひなせり草紅葉　斗門　昭六

谷川の水からくりや草紅葉　瓢々　同七

門入りて庵は遠き草紅葉　芥子　同七

菊

晝深く松風吹けり菊花展　草史　昭七

菊人形翳せる笠も秋闌けぬ　墨石　同八

菊置きてケビンは秋の日影かな　壽人　同八

コスモス

日の闌けて風すさまじや秋ざくら　草史　昭五

コスモスの盛りを過ぎし亂れ咲き　雲濤　同八

甘藷

ハンカチを膝に夫人やふかし甘藷　壽人　昭八

朝顔

雨に見る朝顔の實のおびたゞし　草史　昭六

龍膽

龍膽に雲多き山の日和かな　曉雨　昭七

龍膽や白雲の這ふ山の肌　雲濤　同八

花葎

山風の流るゝ様や花葎　露鳴　昭二

草の花

草の花牧童柵に笛吹ける　墨石　昭四

父逝く

御佛に秋くさ〴〵の花涼し　露鳴　同六

鳳仙花

溫泉の窓や煤煙ふりそゝぐ鳳仙花　洳水　昭八

秋薔薇

秋薔薇に風なく空の深さかな　露鳴　昭七

鷄頭

鷄頭や濃き影落す甃　墨石　昭四

芭蕉　芭蕉葉に流るゝ雨となりにけり　白映　昭七

稲　から〳〵に乾きし道や稲車　曉雨　昭五

豊秋の瑞穂の稲の刈られけり　墨石　同七

落穂　水にある落穂の色の濃かりけり　草史　昭六

芒　穂芒や雲平かに横はる　墨石　昭三

穂芒に刺して歸れる山のもの　進　同八

穭　穭田や風に流るゝ水の塵　草史　昭六

冬

時候

冬凪

冬凪やふね泊ること小半日　墨石　昭六

冬めく

冬めきてとある邸の籬かな　白映　昭六

冬ざれ

冬ざれや藁塚にさす月の色　芥子　昭六

短日

短日の夕潮迅くなりにけり　墨石　昭八

短日の船出づるより波たかし　同　同八

短日や山上に焚く茶の煙り　白映　同八

短日やもつれからめる梭の糸　瓢々　昭八
短日や追はれて出づる城の門　芥子　同八

冬の夜
夜半の冬想ひ起すもはかなごと　紫津女　昭七

寒さ
荒海の月光寒きマストかな　弘躬　昭八

小春
甲板に出でゝ小春のほつれ髪　弘躬　昭七

寒日和
水底の木は泥を着て寒日和　三石　昭八

大寒
大寒の薄日のあたる梅もどき　墨石　昭五

大寒や海峡の潮流る見ゆ　同　同五

行年
ゆく年の塵焚く煙や文珠寺　草史　昭七
草史君と相親む既に一年半なり
行く年の酔そゞろなる夜の雨　暁雨　同八

師走
なにやかと師走用事や障子貼　瓢々　大一四
極月の渡世の茶椀並べけり　墨石　昭七
師走空映りて澄める山井かな　暁雨　同七

年の暮
年の瀬や燈つらねて魚市　瓢々　昭七

大晦日　輪飾をかけたる舟や大晦日　りよ女　昭四

春近し　一握の土春近き匂ひかな　暁雨　昭八

天文

時雨　小夜時雨忽ち星の降るばかり　墨石　昭二

金堂の扉にはら〱と時雨かな　同　同七

東山日のさしてゐる時雨かな　雲濤　同七

嫁ヶ嶋浮ぶ湖水の時雨れけり　同　同八

朱京庵門前の池畔に佇つも君既に逝きてなし
嘗て君と語りし日を偲ぶ

朱京庵水にうつりて時雨れけり　草史　同七

三品金行君葬儀

密林に葬煙かゝる時雨かな　同　同八

王石櫟訪問

しぐるゝや祇園の下の庵主　りよ女　同四

あしもとの艶なるさまや時雨傘　弘躬　同七

石山

船を待つ時雨の部屋の灯りけり　芥子　同八

冬の雨　夕明り冬雨しげき水ノ面哉　雲濤　昭七

林檣や寒雨やみたる夕日影　草史　同八

霜　いち早く大甕の霜解けにけり　草史　昭六

冬霞

冬かすむ文珠の寺や鐘をつく　草史　昭六

布引や山裾深く冬がすみ　雲濤　同七

齒朶のみち遠山冬をかすみけり　曉雨　同八

霰

岩蔭の霰にとゞく夕陽かな　草史　昭五

雪

降りやみて笹葉を落つる雪の音　雲濤　昭六

嶋間を漕ぎ行く舟や深雪晴れ　同　同八

内海や月の雪嶺まのあたり　草史　同六

街の灯の色更けにける深雪かな　同　同八

ひとしきりはげしき雪に出でなやむ　斗門　同五

雪積むや通夜の鉦鳴る壁隣り　曉雨　同七

冬晴

笹代女の柩を送る

冬晴の山より曇りかゝりけり　曉雨　昭六

赭土に建つ山寮や冬日和　瓢々　同八

冬晴や竹を伐り出す端山口　雲濤　同八

冬空

冬空や曇りがちなる旅の路　雲濤　昭七

冬の日

柩を送り出せば残るは我等二三人なり

送り出して爐邊の廣さや冬日影　曉雨　昭六

丹波路の冬日にそゝる巌かな　草史　昭八

颪　寂として花圃に花なし摩耶颪　白映　昭六

から風　から風やうす日あたれる牧の径　草史　昭八

北風　寒風に瀑水しぶくところかな　弘躬　昭七

北風の天空颱と星の数　同　同七

街頭に千人針を乞へるを見て

寒風や媼が乞へる針のかず　同　同七

地理

冬の山　校門に道一すじや山眠る　瓢々　昭八

涸瀧　瀧涸れて山静かなる庵かな　墨石　昭五

動かざる雲のま下や冬の瀧　斗門　同五

冬の泉　冬泉の音のこもり居る葎かな　露鳴　昭八

冬水　冬水や土崩れたるさゝ濁り　草史　昭四

冬の海　冬海や見ゆるかぎりの浪がしら　墨石　昭七

人事

風邪

風邪の子に水銀の尖き四十度　墨石　昭八
風邪の子や火の唇あいて今眠る　同　同八
風邪の子に佛の祖母の灯り居り　同　同八
風邪の子に醫師の顔の大いなる　同　同八
風邪の子や不圖坐りたる眞夜の牀　同　同八
卒然と風邪の褥灯ともれる　白映　同六
風邪の子の日向の縁に機嫌よし　瓢々　同八

夜番

夜廻りの提灯かざす雪の上　紫津女　昭八

戻り來し夜番に煮ゆる鍋のもの　同　同八
夜番の火伽藍の闇に遠ざかる　墨石　同八
夜警子の頭巾をとれば美少年　同　同八
提灯をうけ繼ぎて出る夜番かな　芥子　同八
提灯の一つを釣りて夜番小屋　同　同八
庵の戸にはげしき柝の夜番かな　白映　同六
夜まはりに月影させる城の道　進　同八

火鉢

來ぬ人に小夜更けにける火桶かな　曉雨　昭八

十二月二十四日母卒す
弔客に火鉢さま〳〵師走かな　りよ女　同八

冬の灯　冬の灯に讀み昂りし軍記かな　瓢々　大一五

火事　山火事にサイレン遠く鳴りにけり　瓢々　昭八

焚火　折々は潮走り來る焚火かな　墨石　昭六

かりうどの膝あぶる焚火かな　同　同七

眞ッ向に六甲曇る焚火かな　斗門　同五

年木　積まれたる年木の上の忘れ鎌　芥子　昭六

納屋の戸の閉まらぬ程に年木かな　同　同六

年木積む寂光院の廂かな　墨石　同六

晝の鐘つたふる山や年木樵　白映　同七

炭　人を待つ炭火の灰の崩れけり　芥子　昭六

懷爐　ほこ〳〵と溫りそめし懷爐かな　白映　昭五

屛風　かりそめの恙にたてし屛風かな　白映　昭七

剝落の色ほの〴〵と古屛風　墨石　同八

襖　夜の客に寢まじき襖閉めにけり　紫津女　昭八

爐初　菊寒くなりたる閨の初爐かな　露鳴　大一五

冬籠　置き變へてみたる藏書や冬籠　芥子　昭六

煖房　煖房やしきりに落つる屋根の雪　墨石　昭六
絨毯の花鳥うつくし煖爐もゆ　昭坡　同七
獨り居の靜けさに鳴る煖爐かな　芥子　同七

冬帽子　横顔のけはしかりける冬帽子　昭坡　昭六

足袋　子の足袋のやうやく指を探しけり　墨石　昭八
白足袋や緋の裾ひける神樂姫　同　同八
けふの塵目に立つ足袋をぬぎにけり　昭坡　同八
弟逝く
足袋草鞋はかせもあへず哭きにけり　草史　同八

褞袍　老骨のたくましくして褞袍かな　曉雨　昭八

重ね着　着ぶくれし幼ながら袖の手をかざす　昭坡　昭八

竹馬　竹馬子やへう〳〵として風に乘る　露鳴　昭六

スケート　スケートや雪に投げある裘　墨石　昭二
スケートに六甲日和續くなる　同　同五

スキー　奥山へ全く消えぬスキー隊　瓢々　昭八

探梅　たもとほる山懐や探梅行　墨石　昭五

探梅にもたらせし茶の濃さかな　芥子　昭六

柴漬　柴漬にさゞ波ありて水澄める　紫津女　昭七

嚔　御僧のなみだしたまふ嚔かな　昭坡　昭七

日向ぼこ　頬杖にゆがめる顔や日向ぼこ　斗門　昭五

掛乞　にべもなく掛ことわりし姉かな　白映　昭六

報恩講　月に灯る紋提灯や報恩講　瓢々　大一〇

厄詣　鐵拐に月落ちかゝる厄詣で　墨石　昭四

年忘　拍子抜けしたる話や年忘　瓢々　昭七

歳の豆　豆打つや納戸の闇へ一とつかみ　瓢々　昭八

酒倉に聲高らかや福は内　同　同八

豆撒くや幼なの聲もまじり居て　同　同八

海女がとる齢をかくせし歳の豆　芥子　同七

餅花　餅花に夜の風きつし百貨店　草史　昭七

年の市　くらがりに宿のふかさや年の市　白映　昭七

寒念佛　とぼ〳〵と橋にかゝりぬ寒念佛　瓢々　大一五
おの〳〵に持つ提灯や寒念佛　同　昭七
寒念佛揃ふて拂ふ袖の雪　りよ女　同五

寒施行　裏山の我が世に古りぬ穴施行　白映　昭三

寒稽古　粥を告ぐ魚板鳴りけり寒稽古　芥子　昭七
掛け聲の高き師範や寒稽古　雲濤　同七

避寒　あけてある避寒の邸見ゆるかな　白映　昭五

寒風呂　寒風呂のこもりてぬくき厨かな　りよ女　昭五

寒の灸　寒の灸得てありがたき媼かな　白映　昭五

寒肥　寒肥やとのぐもりして山畠　草史　昭六
寒肥や柄杓をわたる風應ふ　露鳴　同七

寒紅　法身に在はして寒の臙脂かな　白映　昭七

熱燗　熱燗に立居見らるゝ座敷かな　紫津女　昭六

寒玉子　寒玉子おとして器ひろからず　白映　昭六

動物

凍鶴　凍鶴に牆の内外静か哉　墨石　昭五
丹頂の月下に凍ゆつがひかな　同　同五

笹鳴　笹鳴や松風しづむ一の谷　墨石　昭三
笹鳴やとのぐもりして寺林　草史　同八

鳰　芦風に鳰の啼く音の遠きかな　芥子　昭七
鳴きつれて茜の波にかひつむり　草史　同八

水鳥　水鳥の流れゆくなる水輪かな　紫津女　昭七
雨晴れし梢の月や浮寝鳥　同　同七
公園に鳴く水鳥や三日の月　天明　同七

鴨　鴨撃つと金泥の潮漕ぎ出づる　草史　昭八

千鳥　波がしらくづれて白き千鳥かな　墨石　昭五

鴛鴦　露丈君の新婚を祝す
月の江の吹き收まりぬ鴛鴦の沓　草史　昭五
鴛鴦の羽に噴水の玉流れけり　同　同八
おしどりに廢墟の月はさしそめぬ　曉雨　同八

鴛鴦のつぶらなる眼をよせあへる　墨石　昭八

梟

雪降るや山梟のまぎれ鳴く　進　昭六

梟なくと耳そばだてぬ通夜の婆　白映　同八

寒鯉

水ナ底にちらばる飯や寒の鯉　草史　昭八

樓脚やしづかに移る寒の鯉　墨石　同八

寒鯉や水翳もなき桶の中　天明　同八

植物

茶の花

茶の花を活けこぼしたる疊かな　草史　昭六

花茶みち鳳凰堂は見え隱れ　墨石　同七

萬両

萬両にあしたの霜の薄からず　墨石　昭八

寒椿

須磨離宮

玉垣の裏山晴れや冬椿　墨石　昭二

寒椿日のあたゝかき雪景色　同　同五

寒椿古城の塀の日に映ゆる　草史　同六

寒薔薇

寒薔薇や空風強き薬廟　瓢々　大一五

寒菊

寒菊に言葉少く病めるかな　曉雨　昭七

落葉　萬雨に積みかさなれる落葉かな　芥子　昭五
落葉掻をり〳〵徑へ出でにけり　同　同七
深山路晴れては曇る落葉かな　瓢々　大一五

散紅葉　足引の山川の瀬の散紅葉　墨石　昭五

冬木立　瀧壺の水音深し冬木立　雲濤　昭八

枯柳　寒亭やそよりともせぬ冬柳　墨石　昭五
湖曇る石山道や枯柳　曉雨　同七

破蓮　破蓮の沈みて水の澄みにけり　芥子　昭七

枯芝　塵燒く火枯芝に燃え走りけり　曉雨　昭八

枯芦　沼の面に枯芦ひくゝなりにけり　草史　昭八

跋

昨年四月二十三日、京阪神の雲母支社聯合句會が山城醍醐寺に催された時の歸途、車中にて吾々神戸支社のものが一團となつて旺んに俳談を試みてゐた際芥子君から、

『雲母も遠からず二十卷に入るのであるから此機會に於て、吾々の句集を刊行し稍ともすれば散逸せんとする雜誌の句を保存しやうではないか
そして吾々自身の作句を顧みて更に自らの進むべき道を見極むる資料ともしやうではないか』

と云ふ提案をされたが同乘の諸君も大いに之に贊意を表したのであつた。

その後壘石、芥子、雲濤が發起人となつて刊行規定を作り關係各位に詢つた處、忽ちにして豫想の人員に倍する贊同者を得たのであつた。

爾來一年餘に亘り、吾々發起人は幾回となく會合研究の上瓢々、草史、曉雨紫津女等の諸君の助力を得て、玆に此句集刊行の目的を達成し得たことは洵に愉快なことである。

尙此の句集は吾々自身の記念出版であつて、敢て世に問ふものでない丈けに吾々に取りては一層愛撫を覺える。

因に此集の名『水門（ミナト）』は芥子君の案であつて時恰も昨年十一月、神戸市に於て『みなとの祭』が創始され全市狂ずるが如き空前の大祭があつた際でもあり此地なべての人の親しみを持つ水門の二字はこの集の名として應はしいものと思ふ。

終りに吾々の日夜敬愛措かざる蛇笏先生が本句集の再選と共に懇篤なる序詞を賜つたことは感謝に堪へない處である。素より未熟の吾々は今日先生の芳志に充分酬い難きを憾みとするが、此機會に於て更に一段と斯道精進の熱度を高め、他日先生の恩誼に答へたい所存である。

昭和九年五月二十日

發起人誌す

7.12

昭和九年七月十一日印刷
昭和九年七月十五日發行

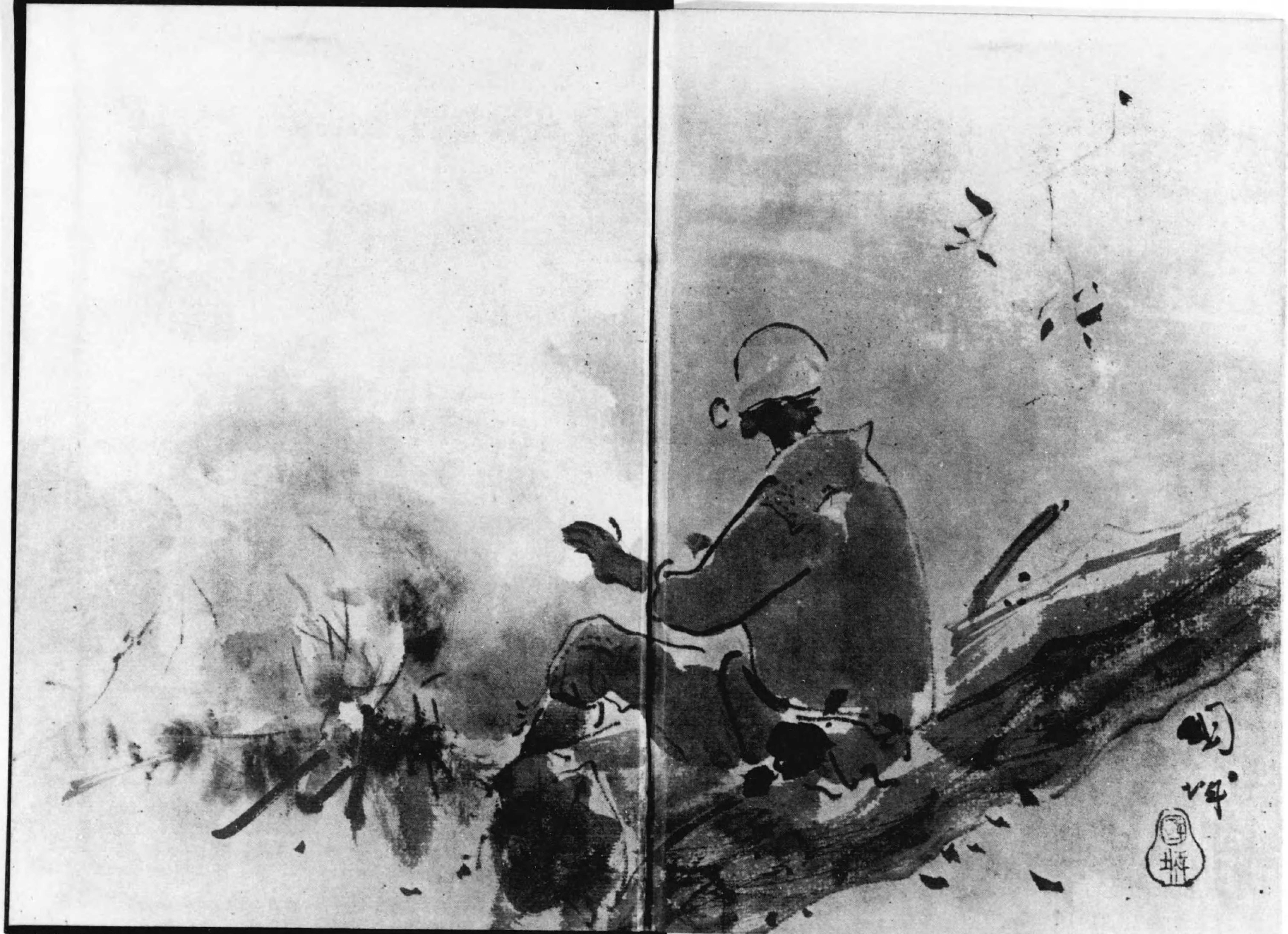
水門（ミナト）

（非賣品）

發行者　小穴忠實
神戸市神戸區中山手通七丁目四一番屋敷

印刷者　兒玉昱松
神戸市神戸區元町一丁目二二九番屋敷

印刷所　兒玉歐文活版所
神戸市神戸區元町一丁目二二九番屋敷



終